

2017年7月2日 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 エフェソの信徒への手紙 1章 1～7節

01:01 神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロから、エフェソにいる聖なる者たち、キリスト・イエスを信ずる人たちへ。 01:02 わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。 01:03 わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。 01:04 天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。 01:05 イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。 01:06 神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。 01:07 わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。

説教『輝く恵みを讃えて生きる』

◆日曜学校の礼拝では、前奏が終ると詩篇 117 篇を司会者と子どもたちと一緒に唱和します。詩編 117 篇は一番短い詩編ですから、『子供讃美歌』の表紙の裏にコピーしたものを貼ってあります。それをみんなで見ながら唱えます。大分以前からそうしていますから、子どもたちはほぼ暗唱しています。今日はその詩篇 117 篇をテキストにして説教しました。そして、礼拝順序を描いたボードに、「詩編 117 篇(957頁)」と書いておいて「詩篇第 117 篇を開けてください」と言いますと、みんな聖書のページを繰っていますが、957頁が出て来ません。子供達が持っている聖書は新約聖書だけだからです。そんなことで、今日は詩編 117 篇を子どもたちに説教しました。150 篇ある詩編の中で一番小さい 117 篇がいかにか大事か、昔もそうだったが、争いが絶えないこの時代に、どんなに大事なことを語り、世界の人々に訴えているか知れないという事を話しました。そして、この詩編の祈りを自分の言葉で言い換えて、お友達にも伝えて下さいと勧めました。朝日新聞の「声」欄に投稿しようということになって、日曜学校の生徒が今、階下で原稿を書いています。

◆さて、ヨハネによる福音書の講解が先週で終わりましたので、今日からパウロのエフェソの信徒への手紙を順に読み進んで行こうと思います。只今、1章1節から

7節までが司会者によって朗読されました。聞いていてずっと入ってくる御言葉もあれば、ずっと入ってこない御言葉もあります。例えば4節にこうあります。「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました」とあります。このパウロの言葉はずっと入ってくるのでしょうか。ここで語られていることは、「このわたしのことなのだ」と、わくわく感をもって、この言葉を受け止めることができるのでしょうか。それとも、気が遠くなるほど遠い過去の、この世界が、宇宙が造られるその前に、ただ神様の御思いの中にだけあったその時に、神様はわたしたちを愛して、キリストにおいて、わたしたちを選んでくださったのです。このように言われても、「そうなんだ」と、アーメン、ハレルヤと、応答できる人は少ないのではないのでしょうか。このわたしにしましても、今日まで、この言葉を受け入れるのに、距離感がずーっとありました。

◆実はわたしは21歳で東京の神学校へ行ったのですが、その時、神学校は6年制で、学生は20人位いました。そして学生会があって、新入生と上級生がペアになって聖書研究をします。わたしは神学校に行って、生まれてはじめて聖書研究なるものを行いました。その時の箇所が実は、今日の箇所を含め、14節まででした。何をどう発表したかほとんど覚えていませんが、1つだけ覚えていることがあります。1節から14節までを読みますと「キリストにおいて」とか、「御子によって」とか、そのような言葉が12～3回出てきます。「このことが大事なのだと思えます」と言いました。そして研究会が終わったら、先輩が「とてもよかった」とほめてくれました。そのことを思い出すのですが、先ほど申しました、「天地創造前に神はわたしたちを愛して、云々」と言うことが、それから半世紀以上経って、ようやく腑に落ちたということです。

◆今日の冒頭を見ていただきますと、こうあります。「神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロから、エフェソにいる聖なる者たち、キリスト・イエスを信ずる人たちへ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストの恵みと平和があなたがたにあるように。」これは短い言葉ですが、当時の手紙の定形の挨拶言葉です。この冒頭で、差出人パウロは、自分のことを「神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロ」と言っております。ご存じのようにパウロは熱心なユダヤ教徒、パリサイ派のエリートの手先でした。彼は、異端というよりも邪教キリスト教を大迫害した人ですね。多くのキリスト者が、彼の迫害によって、死に追

いやられました。そのパウロが、キリスに捉えられ、回心し、キリスト教会の大迫害者がキリスト教の大伝道者に変身するのです。もし、神様の御心で天地創造の前から御計画を持たれて、パウロがそうなるべく選んでおられたのであるならば、そのような迫害の前科なしに、ストレートにクリスチャンにし、伝道者にすれば、そういう痛ましい迫害なしに済んだことですね。しかしそんなこともやった後で、神様は、イエス様はパウロを捕え、回心させて、キリスト教の伝道者に変えられたわけですね。ですから、わたしたちのキリスト教信仰というのは、きれいに事は運ばない。こんなことがなければどんなによかったかと思うような事も織り込まれ、その上で、その事さえも超えさせるものとしての神様の恵みと真実の啓示に捕えられて、初めてクリスチャンに、キリストを信じる者に変えられるのです。

◆久しぶりに思い出しましたが、あのバルトが「信仰は出会いの贈り物です」と言っています。信じて奇跡が起こるのではなく、奇跡を信じるのが奇跡なのです。人生の途上で本当にキリストに出会い、神様の啓示に捕えられて、「我、信ず」という以外にない経験を、神様の恩寵として与えられるのですね。詩篇第117篇の表現ならばこうなります。「主の慈しみとまことは永久に私たちを超えてかつよい。」わたしたちの理解をはるかに越えた神様の御心によってパウロはキリストの使徒とされたのでした。

◆このパウロのエペソ書の冒頭はこうでした。「神の御心によってキリスト・イエスの

使徒とされたパウロから、エフェソにいる聖なる者たち、キリスト・イエスを信ずる人たちへ。」つまり、パウロが人知を越えた神様の御心によって使徒とされたように、「エフェソにおられる皆さんお一人、お一人も、ただ神様の御心によってキリスト・イエスを信ずる者とされたのです。神様の御心によらないキリスト者は一人たりともおりませんという思いでパウロは語っているのであります。今日・ここに生かされている私達一人一人のキリスト者もまた、全くただ神様の御心によってある事をゆるされているのであります。

◆「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」実はわたしたちが気づく前から、それこそ「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。」それこそ、「私たちの理解を越えた神様の恵みがわたしたちを覆い、その真実は永久に絶えることはない。」これが詩篇117篇

の世界ですね。そして、「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」これは手紙の定型句ですね。しかしこの形通りの挨拶言葉は、正に詩篇 117 篇的ですね。しかし短い言葉で、言うべきことは言いきっている。「主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」本当に、人が人に対して願うこととして、これ以上の願いはないのではないのでしょうか。

◆しかし、わたしたちが本当に心から信じて喜べる時と、試練によってそうはいかない時があるわけです。そのような試練の時もあるけれども、このキリストからの恵みと平和が我々を本当にどんな時にも包み、顧みて導いてくださる。それはどこしえに変わらないのです。この事実は何があっても動かないのです。

◆今日の週報上段を御覧いただきますと、7月の聖句が記されています。6月の聖句を皆さんはまだ覚えておられますか。6月の聖句に何を載せたかといいますと、「讚美歌 21」の「まえがき」にこんな御言葉が記されていました。<「後の世代のために、このことは書き記さねばならない。『主を賛美するために民は創造された。』」（詩編 102:19）>。そして7月の聖句は、<「あなたがたの中で苦しんでいる人は、祈りなさい。喜んでいる人は、賛美の歌をうたいなさい。」（ヤコブの手紙 5章 13節）>。苦しむ者が、たとえ祈らなくても、神はわたしたちの祈りを見通しておられます。そのことは苦しみの中では現状の解決には即なりませんけれども、わたしたちがある時点でキリストに捉えられ、その恵みを与えられ、そしてこの恵みは本当に何があっても崩れないのだということ信じられた時、御心は昨日や今日始まったものではなく、正に天地創造の前に神様がそのことを決意され、そして今そのことを果たしてくださったのだと確信できます。ですから、神様の恵み、慈しみは世の造られる前からそうだし、その後もずっとそうだ。今もそうだ。そして世の終わりに至るまでそうだ。そのことを、パウロはここでキリスト中心に語っているのです。

◆私たちは、イエス・キリストの一端に触れた時、神様の恵みの御心の初めから終わりまでと、そして変わらないことがセットになって示されるわけです。マルコによる福音書の中に12年間長血を患っていた女性が、イエス様の衣の端にふれたら、たちどころに癒されたという話がありました。実は以前よく歌った永井修先生の愛唱歌があります。10年ほど前に召された先生で永井春子先生のご夫君ですが、森小路教会で長く牧師された方です。その修先生の愛唱賛美歌が旧の399番です。

“天の力にいやしえぬ悲しみは地にあらじ”と繰り返します。そのような次第でありまして、私たちに何があっても揺らぐことのない父なる神様とイエス様によって、その慈しみの御手に常に抱きかかえられています。それに対して私たちの方もイエス様のものとされ「イエス様は私のものなのだ」(旧讃美歌529の英語版)という感覚で、私たちがイエス様を抱きかかえる。そういう一体感を持ってこれから過ごして行きたいものだと思います。

◆お祈りいたします。

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。あなたの御心を改めて思い知らされ、心から感謝いたします。あなたは顧みていてくださいます。世の初めから世の終わりまで恵みと真実とをもって、わたしたちをかえりみ、導いてくださいます。そのあなたを心から信じて御名を讃えつつ歩む者達として下さい。そしてこの恵みを全ての人々に伝えて行く事ができますよう導いて下さい。この祈りイエス様の御名を通し御前にお献げいたします。アーメン。